



説教要旨「ユダの裏切り」



ルカによる福音書 22章 47～53節

イエス様は弟子たちと食卓を囲み、いわゆる「最後の晩餐」をとられた後、オリーブ山に行き、そこで祈られました。そこに武装した群衆が押しかけてきました。彼らを先導するのは、十二人の弟子の一人であるユダです。つい先ほどまでイエス様と食卓を囲んでいたユダがイエス様を裏切り、敵対者に売り渡したのです。このユダの裏切りの動機についてルカ福音書は、「ユダの中にサタンが入った」(22:3) からだと語っています。また、「サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた」(22:31) とのイエス様の言葉をも加味すれば、このユダもサタンによってふるいにかけられ、その試練の中でイエス様を引き渡す者となったということでしょう。そしてこの、サタンのふるいにかけられたのはユダだけではありません。

サタンは“恐れ”をふるいとして用います。弟子たちも恐れに捉われ、二振りの剣を用意しました(22:38)。恐れに支配され、自分の身を守ろうとした彼らは、大祭司の手下の耳を切り落としました。また、武装した群衆を引き連れて捕らえに来た祭司長、神殿守衛長、長老たちも恐れに捉われているという点において同じです。イエス様は毎日神殿の境内で教えておられたのに、そこで捕えることをせず、人目を避けてこんな夜ふけに襲ってくるのは、彼らが民衆を恐れたからです。互いが互いを恐れ、身を守ることに必死になっている、そういう中で人は、憎み合い、傷つけ合い、殺し合うのです。

サタンのふるいにかけられるような試練は、私たちも経験します。試練の中で、祈りを失い、信仰を失い、イエスなど知らないと言ってしまふ。そんな私たちは、このユダの裏切りを他人事として眺めていることなど出来ないのではないのでしょうか。

恐れる思いから自由になれず、大切な人をも傷つけてしまう私たちのために、イエス様は十字架へと歩まれました。互いが互いを傷つけあう道ではなく、自らを捕らえ、殺そうとする敵を癒され、十字架で死なれたイエス様をしっかりと見つめつつ、このレントのときを歩んで参りましょう。